



特集 様々な「かたりつぎ」のあり方を考える

ー東北・新潟・兵庫「災害かたりつぎ研究塾」ー

災害のかたりつぎの方法は、語り部、手記、震災遺稿、式典など、有形無形の様々な方法があります。また、阪神・淡路大震災のみならず、中越地震、東日本大震災など、地域や、災害からの時間経過などの違いにより、「かたりつぎ」のありようは千差万別です。今回は、各地域で行われている災害のかたりつぎの「いま」を共有し、「これから」のかたりつぎ方を考える「災害かたりつぎ研究塾」について、レポートします。

災害かたりつぎ研究塾を開催しました

資料室では、東北大学災害科学国際研究所、公益社団法人中越防災安全推進機構、神戸市立地域人材支援センター、当センター研究部との共催で「災害かたりつぎ研究塾」を開催しました。多くの被災地では、語り、遺構、展示を通して、災害の経験や教訓を伝えようとする試みが行われています。災害かたりつぎ研究塾では、各地の被災地を訪問し、被災地における資料の収集・保存に関わる実践的な活動を見学し、震災当時の体験談を聞きながら、災害のかたりつぎについて参加者とともに考えていきました。

8月には夏合宿として東日本大震災の被災地を、11月には秋合宿として新潟県中越地震の被災地を訪問しました。そして、12月には冬合宿として、阪神・淡路大震災の被災地を訪問しました。

夏合宿では、震災の傷跡がいまだ癒えない東日本大震災の被災地で徐々に始まっている震災の経験・記憶・記録の継承に関する実践的な活動について学んでいきました。特に興味深かった点として、語り部による講話は、震災からあまり月日が経過していないためか、大変迫力のある内容で、震災の恐ろしさが伝わり、震災の記憶を後世へ伝えようとする意志を強く感じました。

夏合宿での語り部による講話の様子



秋合宿では、新潟県中越地震の被災地および中越メモリアル回廊の各拠点をめぐりながら、震災の記憶継承と多様な復興のあり方について学びました。中越地震では、「長岡震災アーカイブセンターきおくみらい」や「川口きずな館」等の施設が被災地に点在し、すべて巡ることで、中越地震がわかるようになっている点が特徴的です。また、展示・震災学習プログラムとともに、地域がベースとなっていることや、訪れる人のニーズ・視点に合わせたプログラムが展開されていました。

冬合宿では、阪神・淡路大震災後に設置されたミュージアムの見学や体験型プログラムを通じ、震災から18年が経過したかたりつぎの成果と課題について学びました。震災を知らない人々が増え続けている中で、特に、若者にどのようにして震災を伝えるかが喫緊の課題となっています。これに対して、地域人材支援センターでは、避難所運営や炊き出し等の体験型プログラムが展開されています。こうした体験型プログラムを通して、阪神・淡路大震災をある種の疑似体験しながら伝えようとする試みは、阪神・淡路大震災の経験と教訓を伝える方法の一つとして大いに参考になりました。

冬合宿の最後には、災害かたりつぎ研究塾の総括として、公開セミナーを開催し、東日本大震災、中越地震、そして阪神・淡路大震災でのかたりつぎの事例を報告しながら、3つの事例を通して記憶の忘却を防ぐことはできるのかを考えていきました。

全国の被災地のかたりつぎを共に考えることは、これからの阪神・淡路大震災の記憶の語り継ぎを考える上でも大変重要なことです。これからも、様々な形で被災地のかたりつぎ活動と連携を深めながら、災害のかたりつぎについて考えいきたいと思います。



秋合宿での震災MAPを使った中越地震の説明の様子



冬合宿でのまちあるきの様子

災害かたりつぎ研究塾

in兵庫の記録

▲人と防災未来センター展示見学

2013年12月7日～8日、災害かたりつぎ研究塾in兵庫を開催し、25名の方々に参加していただきました。また、夏に東北、秋に中越と継続して開催してきた研究塾の締めくくりとして、2日目には、当センターが主催して開催している災害ミュージアム研究塾との合同セミナーも開催し、こちらの参加者は44名でした。

1日目は、まず当センターを会場とし、展示見学を行いました。また、「かたりつぎ」の手がかりについて考えるため、震災資料に関して震災資料専門員が説明を行い、当センターの語り部による講話を聞きました。

その後、神戸市立地域人材支援センター（神戸市長田区）に会場を移しました。地域人材支援センターの建物は、旧神戸市立二葉小学校の校舎を利用したもので、阪神・淡路大震災当時は、実際に避難所として多くの方々がここで生活を送りました。そのことから同センターでは、震災学習の取り組みのひとつとして、避難所体験プログラムを実施しています。これは同センター内の教室や講堂のスペースを利用して、段ボールを使って避難所での生活空間づくりを体験するというものです。今回も、参加者それぞれが、最初は段ボールの使い方に迷いながらも、思い思いの工夫をこらしながら設営を行い、実際にそこで宿泊しました。また、同センターの語り部から避難所での体験について学び、それをもとに災害の「かたりつぎ」について議論しました。

2日目は、阪神・淡路大震災で甚大な被害を受けた神戸市長田区の御蔵地区や新長田駅周辺のフィールドワークを行い、震災当時のようすや、復旧・復興の過程と、現在における課題について地元の方々から説明をうかがいました。

フィールドワーク後、「災害の記憶の忘却を防ぐことはできるのかー3つの災害のかたりつぎからみえることー」と題する公開セミナーを行いました。3回にわたった災害かたりつぎ研究塾での議論をもとに、東日本大震災、中越地震、阪神・淡路大震災それぞれの場における取り組み事例の比較を通して、災害の「かたりつぎ」の方法について意見を交わしました。

今回のかたりつぎ研究塾参加者からのアンケートでは、「様々な場所での語りを聞くことができて良かった」「1か所でおわらないまち歩き、語りを知ることができた」といった感想のほか、東北で開催された夏合宿、中越で開催された秋合宿との対比のなかで、今回聞くことのできた震災体験の語り方を捉える声もありました。この点については、2日目の公開セミナーでも議論された点と共通するものです。全3回にわたる企画と、その総括としての公開フォーラムを通じて、様々な災害によって被災した各地で、災害の経験がどのように継承されていくのかを、今後の展望も含めて意見交換することができたように思います。

そして来年度以降も、今回のような幅広いネットワークを活かした企画を行いたいと考えています。



▲ 段ボールを使った避難所体験



▲ 神戸市長田区のフィールドワーク



▲ 公開フォーラム

お天気コラム

身近に活かされている
100年以上前の資料

資料室で働いていると、北海道から沖縄まで、全国各地の公文書館など(英語では“Archives”) で働く方々と知り合いになることがあります。人と防災未来センターでは、主に19年前の阪神・淡路大震災に関する資料が保存・公開されていますが、公文書館などには100年以上前の

資料が保存されています。今から100年前というと、桜島が大噴火し、ヨーロッパを中心に第一次世界大戦が始まった年です。また、このころは、インターネット、携帯電話、パソコン、テレビ、ラジオのいずれも無い時代です。写真や動く映像(動画)はありましたが、白黒で、音声がないのが当たり前、映画館には「活動弁士」がいました。そのため、当時の資料というと、文書や白黒フィルムが主体です。

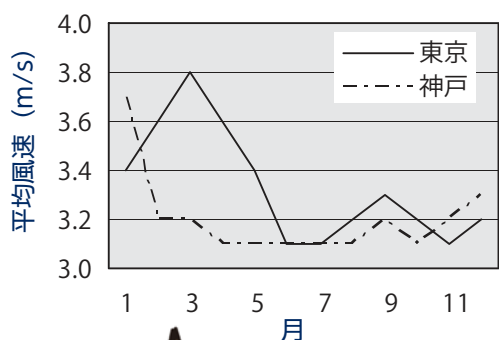
実は、100年以上前の資料も、今の私たちの日常生活になくてはならないものなのです。

例えば、天気を正確に予測する際には、100年以上前のデータも重要になってきます。もし、100年以上前のデータが保存されていなければ、天気予報が当たる確率は低くなっていたことでしょう。というのも、「100年に1回の大雪」が本当に「100年に1回」だったのかを検証したり、事前に予測したりするためには、過去の資料が不可欠となります。人と防災未来センターのすぐ西にある神戸地方気象台では、100年以上前の海洋観測データが整理されてきました。これは「神戸コレクション」と呼ばれることもある、世界的にも貴重な資料で、未来の気候予測になくてはならないものです。

さらに、公文書館などには300年以上前の資料も保存されていることがあります。今から300年前というと、カメラも蓄音機もなく、東京は江戸と呼ばれていました。そんな江戸の庶民事情ついて書かれた『武江年表』には「雨が少ないので大変」などという記載が冬にもよく見られます。『武江年表』によると、明暦2年11月から翌年1月にかけても雨が少なかったようです。別の資料『徳川実紀』には、明暦3年1月18日(現行暦では1657年3月2日)、雨がまったく降らず、今で言う防火水槽が涸れていたため火を消すことができず、一瞬にして火災が大きくなったと記されています。これは「明暦の大火」と

呼ばれ、江戸時代で最も大きな火災の一つとされています。さらに、この日は風も強かったようです。江戸時代の文書には、「風が強いので火の取り扱いに注意」と記されたものがあります。明暦の大火は発生2日後に大雪が降って治まったようですが、その後も大雪が降り、住む家を失った中、寒さで凍死した人も多かったそうです。また、明暦の大火の痕跡は地層にも残され、遺跡調査の際に見つかることもあります。

(担当 谷岡能史)



東京と神戸の平均風速
(データは気象庁による)



阪神・淡路大震災に伴う火災(神戸市東灘区)

「東日本大震災・暮らしサポート隊 みちのくだんわ室一年の記録」を開架しました

資料室では「東日本大震災・暮らしサポート隊 みちのくだんわ室 一年の記録 2011.6～2012.5」という記録誌を新たに開架しています。

暮らしサポート隊は、石東直子さんのお声掛けにより結成されたグループで、東日本大震災によってやむを得ず神戸に避難されている方々へ、避難者同士のネットワークづくりの場の提供を軸に活動されています。2011年6月から、毎月1回「みちのくだんわ室」という避難者が集う交流会を、これまで延べ30回開催されています。本書は、その活動の一年間の記録をまとめたものです。

石東氏は阪神・淡路大震災当時、都市計画プランナーとして、コレクティブハウジングの導入や復興住宅におけるコミュニティ支援等を行ってこられました。暮らしサポート隊のメンバーには、石東氏以外にも、19年前の阪神・淡路大震災後の仮設住宅や復興公営住宅等で活動をしてきた方々がいらっやいます。

本書では、避難者の方々のインタビューや活動に対する感想が掲載されています。本書の端々から、避難者の方々の神戸での生活までの過程や苦悩が垣間見られます。また、活動を通して、日常を取り戻すことができたことへの喜びや、神戸への感謝の思いを知ることができます。改めて、人々に寄り添った息の長い活動が大切であることや、神戸だからこそできる支援があることが分かります。

東日本大震災と阪神・淡路大震災。それぞれの震災は多くの面で異なるものの、震災に対して失われた悲しみについては共感できるからこそ、阪神・淡路大震災を経験した人々が東日本大震災で被災した人々を支援する意味があると思います。東日本大震災の直後は、「絆」や「助け合い」といった表層的な言葉が乱立しましたが、本書を通して、本当の意味での絆が生まれていることを読み取ることができます。

2013年度末には、本書の続編として、「みちのくだんわ室 記念誌2」として、「(仮)被災者の今、2年の想いを後世につなぐ」をテーマに発刊される予定(みちのくだんわ室だよりvol.21参照)とのことです。今後の活動にも注目していきたいと思います。なお、活動に興味のある方は、暮らしサポート隊ホームページ(http://www.geocities.jp/kurasapotai/0_home.html)を是非ご覧ください。



みちのくだんわ室一年の記録



みちのくだんわ室だより

ホームページから、本書を購入することもできます。また、本書は資料室でも閲覧することができます。

みちのくだんわ室の活動記録が掲載された情報誌「みちのくだんわ室だより (Vol.1～Vol.21)」もあわせて開架しています。

当センター震災資料専門員の 石原凌河が1月末で卒業します

2012年4月から当センターの震災資料専門員として働かせていただいた、石原凌河が1月末で退職し、2月からは大阪府立大学の教員に着任することになりました。本当にお世話になりました。実のところ、センター着任直後は、阪神・淡路大震災の教訓を伝える仕事に携わっているのかなという一抹の不安がありました。自分自身、阪神・淡路大震災の時は、小学校1年生で、京都の実家にいました。直後の揺れの恐ろしさは今でも覚えているものの、その後の復旧・復興過程については全く知らなかったからです。しかし、1年10ヶ月の間で震災資料専門員として業務を経験させていただいたおかげで、そうした不安が一蹴されました。

資料室の業務を通して、阪神・淡路大震災に関する数多くの資料と出会い、こうした資料を通して継承することの意義と同

時に難しさを実感しました。また、寄贈者の方々から伺った資料にまつわるエピソードにはいつも共感させられました。

資料の活用面では、災害ミュージアム研究塾の企画に携わることができ、阪神・淡路大震災だけではなく、全国の災害展示やアーカイブの実践者と出会うことができました。こうした経験から、今では、阪神・淡路大震災の記憶継承に終わりはなく、むしろ自分自身が、震災資料や語り部さんの経験談等を基に語り継ぎの実践者になることが大切であることを痛感しています。

今後は、震災資料専門員の業務を活かし、教育・研究を通して災害の語り継ぎの方策について考えていきたいと思っています。特に、阪神・淡路大震災を経験していない私自身が、阪神・淡路大震災を知らない大学生に震災を伝えることを教育の中で実践していきたいです。退職してからも、人と防災未来センターに関係してくださっている皆様にお世話になりながら、センターが災害の語り継ぎの中心施設として担えるよう、少しでも恩返しをしていきたいです。今後とも、資料室、そして石原凌河ともども、引き続きご支援していただけると有り難いです。

皆様どうもありがとうございました。

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念

人と防災未来センター 資料室(西館5階)

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

TEL.078-262-5058 FAX.078-262-5062

HPアドレス <http://www.dri.ne.jp>

開室時間 9:30～17:30(展示施設とは時間が異なりますので、ご注意下さい)

閉室日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日) 12月29日～1月3日

資料室は無料で
ご利用いただけます